

[掲載紙] 朝日新聞「上州経済風信」

[掲載日] 2012年6月21日

[テーマ] 群馬の「ものづくり」への印象—伝統守り進取の気風も—

5月半ば、前橋に着任した。初対面の人たちから、「群馬県の印象は？」とのご質問をよく受ける。「東京に近い」「豊かな自然に囲まれ、名高い温泉地が多い」「ものづくりが盛ん」などとお答えしている。

ものづくりとえば、群馬の産業構造は全国平均と比べて製造業の割合が高い。

■ 県内総生産にみる産業構造

(構成比、%)

	群馬県	全国
第1次産業	1.5	1.2
第2次産業	33.3	25.2
製造業	28.0	19.4
うち一般機械	3.3	2.0
電気機械関連	2.7	2.9
輸送用機械	6.8	2.5
建設業	5.3	5.5
第3次産業	65.2	73.6

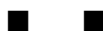
※内閣府「国民経済計算確報」、群馬県「県民経済計算」から。
群馬は2009年度、全国は2010年

ただ、農業やサービス・観光も盛んでバラエティーに富み、あまり偏りがないように思われる。

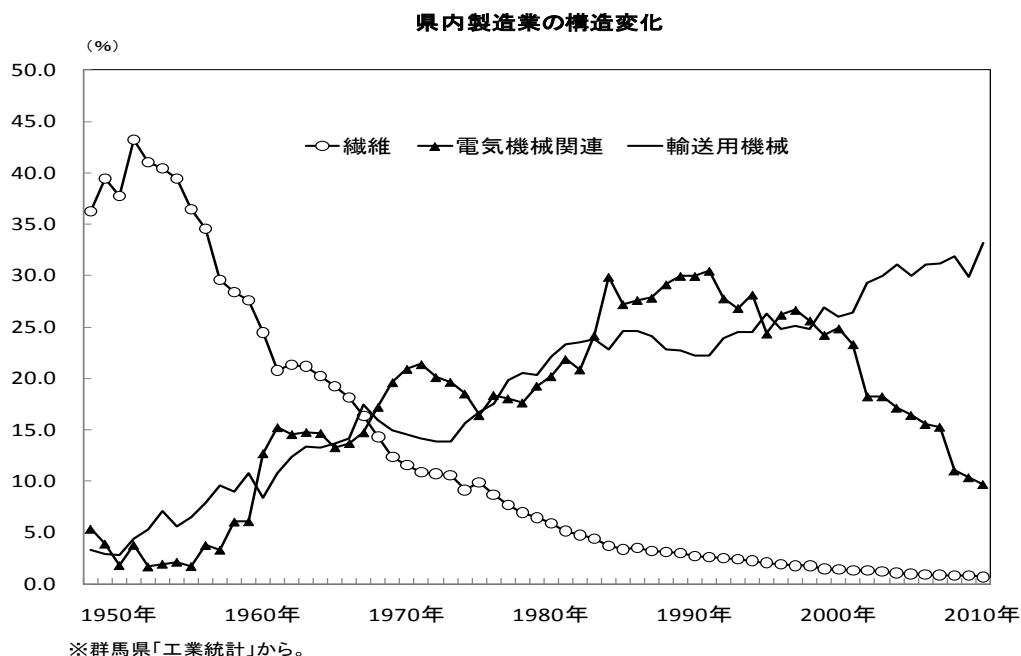


「絹の国ぐんま」と言われるように、長年にわたり絹産業（蚕を育てて繭を作る養蚕、繭から生糸を作る製糸、生糸を布に織る織物）が県内経済の発展に貢献してきた。1947年に誕生した「上毛かるた」も44枚の札のうち絹産業を詠んだ札が5枚ある（ま＝繭と生糸、に＝日本で最初の富岡製糸、け＝県都前橋の生糸、き＝機どころ桐生、め＝銘仙織の伊勢崎）。

また、地元の詩人萩原朔太郎は、随筆「^あ或る詩人の生活記録」の中で、当時の前橋を「昔は小さな貧しい田舎町であつたのが、（中略）関東屈指の都市にまで発展してきた」「町の郊外の空の上には、（中略）工場の煤煙が、^{たこ}風のやうに吹き流れてみた」と書いている（「朔太郎と前橋」、波宜亭倶楽部編・著より）。



県内の工業品出荷額をみると、絹織物などの繊維工業が製造業の主力だったのは60年代前半ごろまで。その後、輸送用機械や電気機械関連の割合が高まり、2000年代に入ると輸送用機械が圧倒的な割合を占めている。



だからと言って、絹産業が衰退の一途をたどったわけではなく、わが国トップレベルの生産量を誇る。絹産業の企業経営者が経営の効率化や生産品の品質向上に懸命に取り組んできた結果なのだろう。富岡製糸場のガイドの丁寧な解説や世界遺産登録に向けた活動からも、絹産業への地元の熱い思いが伝わってくる。



着任直後に前橋市内で購入した自転車で敷島公園を訪れ、ばら園内を散策した。約600種、約7千本のバラの中に、前橋（バラは市の花）のオリジナル品種「あかぎの輝き」があった。花卉の色がつぼみから満開になるにつれて、黄色→オレンジ→赤へ変化していく珍しい品種だ。

絹産業などの伝統を守りつつ、新たな産業振興にも取り組んできた県経済に相通じるものを感じた。これから、バラエティーに富んだ県経済の底力をじっくり見つめていこうと思う。

〔 日本銀行前橋支店長
相良 雅幸 〕